

---

# ハケ代あやねの幸福論

うみの えび

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

八ヶ代あやねの幸福論

### 【Nコード】

N0552Z

### 【作者名】

うみの えび

### 【あらすじ】

つい考えすぎてしまう女子高生と、明朗快活な男子の恋愛の話。

「そう、悪い意味じゃないの……」萌絵は軽く微笑んで答えた。「先生、素朴と単純って、どこが違うのかしら?」  
 「現象としては同じだ。まあ、違いといえば、観測者の先入観かな」犀川の返答に、萌絵は吹き出した。

笑わない数学者

/ 森 博嗣

身体が熱くて、どうしようもない。  
 顔は火照っていて、呼吸も荒くて、どくどくと血液の流れる音が耳に障る。

いつからだろう。

あたしは優しく包まれていた。

今はもう、なにも考えられない。……このまま目を閉じて、眠ってしまいたい。

そう思っていたときだった。

「はい、三十七度八分。立派な風邪です。だれか迎えに来てもらえる人はいる?」

「……お母さんが」

あたしが声を振り絞って答えると、

「じゃあ連絡しておくから、今日はもう家で安静にね」

「……あい」

はい、と言ったつもりが口が回らず、あたしはそのまま、クラクラした頭で笑顔と白衣の眩しい保健の先生の姿を見る。

白いシーツが気持ちよかった。朝のホームルーム中にダウンしたあたしは、まっすぐ保健室に運ばれてベッドで寝かされていたのだ。季節の変わり目はいつも体調を崩してしまう。高校生になったばかりでまだ新しい環境に慣れていないのもあるせいかな、今回の風邪はいつもよりきつい。

先生は保健室から出て行ってしまった。親への連絡と、あたしの荷物を取りに行ってくれたのだ。

あたしは身体を揺すって横向きになると、意識的に自分の重さを布団に預けてみる。

身体は、沈み込んでいくはずだ。

……だけど、こうすると浮いているような感覚になる。

「うぐ……」

なんだか、こんなとりとめのないことばかり考えてしまう。体調が悪いといつもこうで、まあ、こんな状態は嫌いじゃないのだけれど。

あたしが暫くぼーっとしていると、

「八ヶ代さん、大丈夫？」

先生と一緒に帰ってきた男子が、軽い調子で話しかけてきた。

「俺のことわかる？ 本郷寺。八ヶ代さんの手伝いに来たんだけど」

「うん……ごめん」

あたしは頭痛を我慢しながら身体を起こす。

（本郷寺君か……）

話したことはないけれど、この人は遊び人っぽくてちよっぴり苦手なタイプだ。

「わ、なんか不謹慎なこと言うけど、八ヶ代さんからなんかまじ良い匂いする。なんか色っぽい」

なんか言ってるけど、それはあたしの眉間にしわを刻む効果しかない。

こっちはキツくて反応してらんないんだから、放っておいてくれるのが一番だ。

……とはいうものの、良い匂いっていうのはちょっと嬉しいかも知れない。

保健の先生はあたしのカバンをベッドに置いて、

「親御さんすぐ来るみたいだから、正門で待ってましようか。本郷寺君と一緒に帰ってくれるらしいわよ。お大事にね」

そして、

「じゃ、カバンは俺が持つよ。歩ける？」

本郷寺君（下の名前は知らない）の背は高い方で、髪はワックスでツンツン立っている。やんちゃ系の女子グループに人気がありそうな顔立ちで、顎が細い感じのかっこいい人だ。

あたしは彼にお礼を言うと、カバンを持ってもらって正門へと向かった。

靴を履いて、昇降口から出る。

本郷寺君はあたしのカバンを片手にぶら下げて隣を歩いてくれている。

見た目の印象とは裏腹に、彼は保健室を出てからはずっと何も喋らずに静かにしている。

それが少し意外で、逆に彼のことが気になった。

気になったとは言っても好きとかそういうのじゃなく、単純に彼に抱いていた軟派なイメージが変わったというだけのことだ。

あたしは病人さながらの様子でクラクラと歩きつつ、その気持ちを整理する。

本郷寺君は優しい。

だけど、やっぱり恋愛対象としてはピンとこない。

……あたしは、どんな人が好きなんだろう。

(彼氏がいるって、どんな感じかな……)

もし今、彼氏がいたとしたら、病気のあたしを助けてくれるだろうか。

もし……本郷寺君が彼氏だったとしたら。

あたしは彼に、やっぱり甘えてしまうのか……。

「……やば」

考えが変な方向にいつてしまった。

本郷寺君に甘える自分を想像して変な気分になりかけたけれど、甘えるって行為には惹かれるものがある。

こうやって、冷や汗をかきながら歩いていればいるほど。

誰かにこの身体を預けられたらどんなにいいだろう……と思う。

そして、それはきつと幸せなことなのだ。

「ハケ代さんって彼氏いるの？」

う、突然。

「いない……かな」

正門を前にしたくらいのときに話しかけられて、あたしは答える。すると彼は興が乗ったように、

「へえ、じゃあ今まで何人と付き合ったことある？」

こつちを向いて話しかけてくる本郷寺君を横目で見て、あたしは次に目を閉じて言う。

「ない」

「ないってなにが？」

「付き合ったことないの」

「えっ？」

えっ？と言う彼をよそに、あたしは正門の門柱にもたれかかる。頭をつけようとしたら勢いあまって軽く打った。痛い。

「八ヶ代さん、付き合ったことないの？」

本郷寺君は目を丸くする。

それもそのはずで、もう高校生にもなるというのに付き合ったことがないっていうのはそろそろヤバいと自分でも思う。付き合ったことがないというのがプラスになるのは中学の初めくらいまでで、あとはどんどん売れ残りとして年月を重ねていくだけ。時間が経てば経つほど手を伸ばされなくなって、最後には見向きもされなくなる。

いまだ彼氏なしというのは、つまり、その危険性を孕んでいる人なのだ。

そして悲しいかな、もちろんあたしもその中の一人なわけで。

「っていうか、八ヶ代さんって綺麗だよな」

そう言ってくる彼に、

「本郷寺君はいっぱい付き合ってきてそうだね。どれくらい？」

あたしは頭痛に眉をひそめて、目を瞑ったまま言う。

正門に、二人きりの状態。

あたしが本郷寺君からの返答を待っていたとき、大通りの歩道を

歩いてきたおばさんが急に彼に話しかけてきた。

「あら、やだわあ。あんた、彼女の介抱してあげてるの?」

「あ、はい。彼女です」

おばさんはにこやかに、

「まあ憎らしい。でも優しいのねえ。えらいわあ」

「いやいや、そんな。キツそうだったんで」

二人で楽しく会話したあと、おばさんはあたしにもお大事にと言  
って去っていった。

あたしは今までとは違う意味で頭にきていた。

(……彼女です?)

勝手になにを言うんだろ。

そんなの決めないで欲しいし、それはどどういう意味なんだ。

「つてか、八ヶ代さんって彼氏作らないの?」

作らないんじゃないかって作れないのだと言いたい。

ほんと、頭痛い。

「俺、こつちにいていい?」

ちゃっかり横に立ってきた彼を若干無視しながら、あたしはなに  
も言わずそのまま門柱によりかかったままでいた。体調がすこぶる  
悪くなってきた、動きたくても動けない。

「本郷寺君、授業大丈夫?」

今はもう一時限目が始まっているころだからと、あたしは彼を見  
ずに訊いた。

「ああ俺、自分から手伝いにきてるから大丈夫。最初から気にして  
ないよ」

と言う彼にあたしは顔を向けて、

「なんで?」

そう訊くと、

「なんでって……ねえ?」

口元がほころぶのを繕うようにしながら本郷寺君は言う。

「理由言っつていいの?」

「言えばいいじゃん」

と言うと、彼はその顔をこっちに向けてあたしの目を見つめた。  
今からなにを……、

「だって俺、八ヶ代さんが好」

「夕陽高っ！ こ、ん、に、ち、わあー！ くう、やっときたか俺  
ー！ よっしやー！」

……やたら元気いっぱいに叫びながら、男子が一人学校にやって  
きた。

両手をいっぱい広げて、ハツとするような可愛い笑顔。

そうやって全身で喜びを表現している彼に、あたしの意識は一気  
に全部持っていかれてしまった。

「……あ、」

彼はこちらに気付いたようだ。

そして、あたしと本郷寺君に見つめられたまま半笑いになって、

「あ、こ、こっ、こんにちは」

と、頭に手を当ててぺこぺこと頭を下げはじめた。

「こんにちは」

あたしも頭を下げる。

彼はまさかここに人がいるとは思っていなかったらしく、恥ずか  
しそうにそそくさと校舎の方へ退散していった。そうなる気持ちは  
痛いほど良く分かる。

あたしが思わず彼の後姿を見送っていると、

「聞こえた？」

「へ？」

「俺が言ったこと」

本郷寺君が、さっきの告白は伝わったかどうかを確かめてきた。

とそこに、一台の軽自動車が止まった。緑色のミニカーみたいな  
可愛いやつで、これはホンダのコペンっていうやつらしい。車に興  
味の無いあたしがこれを知っている理由は簡単。

「あ。これ、うちの車。本郷寺君わざわざごめんねっ。ありがとう」

そう言っであたしが差し出した手に、本郷寺君はカバンを渡してくれた。

本郷寺君はカバンを持っていった手を振って、

「それじゃまたね」

「うん、ばいばい」

あたしは助手席に乗り込んで、カバンを前に抱える。

「なにあやね、あの子彼氏なの？」

「じょーだん」

隣の運転席からのお母さんの声に、あたしはばかばかしく答える。

お母さんはクスッと笑って、

「なんだか元気そうじゃない。先生、相当体調が悪そうだって言うてたけど？」

「ん……」

あたしは車に揺られながら、自分の体調を意識してみる。そして、

「……お母さん」

「なあに？」

「あたし、今まですごくマイナスだったんだけど、今は差し引きゼロみたい」

言うあたしに、お母さんはハンドルを切りながら、微笑ましげに、

「なんかいいことあったの？」

あたしは、さっきの鮮烈な印象の男子の姿を思い出す。

なんというか、あのポーズはパーフェクトだった。

「うーん……」

あたしはなんだか可笑しくて、そして何故か嬉しくなってくる気がした。

もしかしたら、あの人の明るいエネルギーがこっちに伝播してきたのかも知れない。

頭の痛みは、いつの間にか消えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0552z/>

---

八ヶ代あやねの幸福論

2011年12月2日00時47分発行